半商品経済を組み込んだ生消共生型の農林産物生産と流通

【代表者・座長】野見山敏雄（東京農工大学）

【概要】

資本主義の矛盾は商品それ自体のなかにあり，現代はそれが先鋭化し，リーマン・ショックに表れているのではないか。その仮説を検証するため，「半商品」＝「生産者と消費者が商品を超えた使用価値を見いだした農林産物」の生産と流通を行う事例を国内及び海外の調査により広く探索し，半商品を生み出す生消共生型の生産と流通のあり方を分析するためのフレームワークを理論的･方法論的に確定する。なお，本研究では渡植彦太郎や内山節が唱えている「半商品」の概念をそのまま援用するのではなく，彼らの半商品の概念を十分に吟味した後，現代的な生消共生という概念への昇華を目指している。一方，生消共生は有機農業や産直の分野で長く使われてきた産消提携と似ているが，単なる「ものの取引」に終わらず，生産者と消費者が互いの暮らしを成り立たせようとする次段階的な概念として位置付けている。

第 1 報告で半商品の概念規定を行い，第 2 報告では有機農産物専門流通事業体の会員アンケート調査から，購入行動における半商品性の把握形成を行う。第 3 報告では生産者・消費者がともに半商品経済の関係に依存する欧米の CSA の事例から，国内有機農業運動の展開について検討する。第 4 報告で共同店の開設と運営において地域住民による労力提供や買い支えによって成立するという半商品性の分析を行った。

【報告者・報告テーマ】

第１報告　野見山敏雄（東京農工大学）
　　本セッションのねらいと半商品の概念規定

第２報告　万木孝雄(東京大学)
　　半商品性の視点による産直農産物購入者の類型化分析

第３報告　波夛野豪(三重大学)
　　半商品経済視点からのＣＳＡ分析－産消提携とＡＣＰ－

第４報告　唐崎卓也(農村工学研究所)
　　共同店にみられる半商品性

なお，本研究は科学研究費補助金〔基盤研究(B)(一般)〕「半商品経済を組み込んだ生消共生型の農林産物生産と流通に関する総合的研究」（2009 ～ 2011 年度）の研究成果の一部であり，報告者の外に千年篤，山崎亮一，福田恵（すべて東京農工大学）をメンバーとする共同研究である。

半商品の概念規定

野見山敏雄

１．内山節の半商品論

・半商品は渡植彦太郎によって提起され，内山節によって補強された概念である。

・職人，芸人などの商品，サービスを事例にあげて，半商品を市場経済と非市場経済の中間に存在する「商品にあらざる商品」,「文化的な商品」,「商品的な合理性を確立していない商品」として規定している。

・半商品としての商品には使用価値の文化が生きていたとして，半商品は具体的な関係の中で作られたり，流通したりする商品だと指摘している。そして，半商品の世界が成立しているのは産直であるとも言っている。

・「半商品とは，商品でありながら使用価値が優先する商品といってもよいのですが，ここで問わなければいけなかったことは，半商品を成立させた関係，交通[1)]とは何かという問題でした。」

・そして，商品を半商品に変えていく関係づくりを通じて，今日の市場経済を内部から空洞化させていくことができたら，市場経済の支配から自由になることができると述べている。

・渡植・内山の半商品の概念は､生産者と消費者の有機的関係の下での使用価値を包摂し、それを作る過程や生産者と消費者との関係では、必ずしも商品の合理性が貫かれていない商品と理解できる。

２．本研究で取り扱う半商品の概念とは何か

・本研究チームはマルクス経済学及び近代経済学のそれぞれの学問領域から半商品について議論してきた。しかし，全員が納得する概念規定が確定したわけではない。

・最大公約数的な半商品の定義は次のとおりである。

・半商品とは商品の取引において社会的な関係性を重視し，生産者の個性が残っているため，市場取引を超えた交換形態が相応しいもの。

・３名の報告では，半商品性や半商品経済という用語を使用しているが，コアとなる半商品の概念については収斂している。

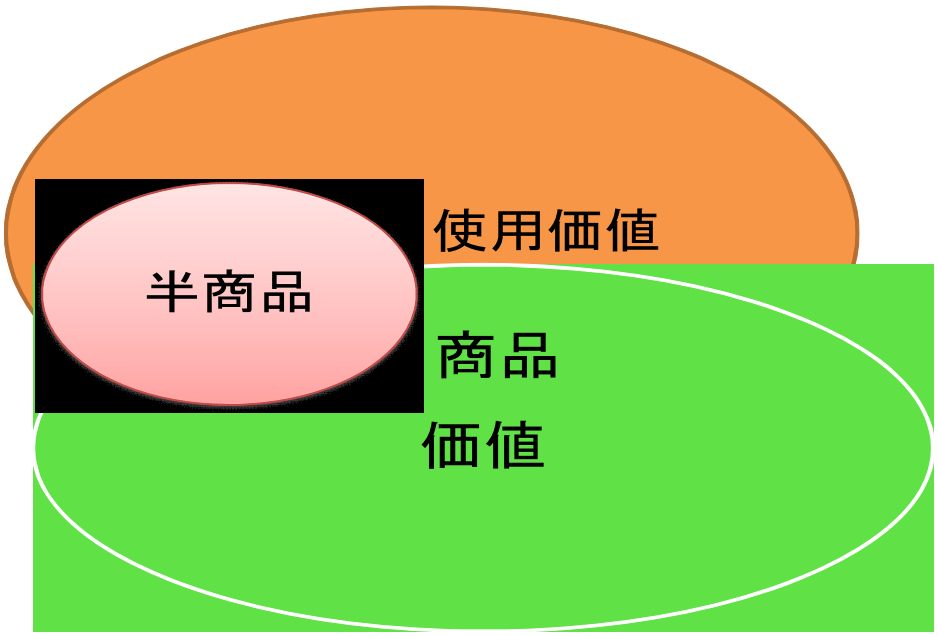

図１　半商品の概念図

３．農業と半商品との親和性

千年は新古典派経済学とセンが提唱した潜在能力アプローチの視点から半商品の性格の究明を試みている（千年 2012 年）。特に，農産物は半商品の例示として相応しく，農産物取引が半商品的取引に転換しやすいのか，次の５つの特性をあげている。

①日常性・多様性

②生産物の非均質性

③生産・消費の近接性

④公共財の利用と保全・創出

⑤歴史性

これら特性に通底することは，農業は本来的に成長を目標とする市場原理主義には馴染まない性格を併せもつという点であると指摘している。

３名の報告をこれら５つの特性と関連させながら聞いていただきたい。

表１　用語の対応表

	マルクス経済学	近代経済学
価値	抽象的人間労働が結晶したもの	相対的希少性を反映したもの
交換価値	商品の交換比率。価値が現象する形態。価格	価格
使用価値	物が持つ人間にとって有用な属性。	消費者余剰，支払い意思額＝限界効用の貨幣評価額
商品	交換を目的として生産される労働生産物で，使用価値と価値という２つの要因を含む。	財，サービス(私的)

註

１)「交通」とは，そのものがあらかじめもっていた固有の価値ではなく，関係の中で生まれ，関係とともに変容するような関係を「交通」とよんでいる。(内山 1998 年，p.17)

引用文献

１．内山節「循環系の社会―ローカルな技術と思想の深みから―」『農村文化運動』148 号，農文協，1998 年

２．千年篤「半商品の性格に関する一考察」未定稿，2012 年

３．社会科学事典編集委員会編『社会科学総合辞典』新日本出版社，1992 年

４．渡植彦太郎『仕事が暮らしをこわす―使用価値の崩壊―(人間選書 95)』，農文協，1986 年

５．渡植彦太郎『技術が労働をこわす―技能の復権―(人間選書 99)』，農文協，1987 年